OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究・実践活動の概要と考察の糸口 : 2000年度
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	ΣYN : ボランティア人間科学紀要. 2001, 2, p. 35-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3202
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ΣYN（ボランティア人間科学紀要）第２号（2001年）別刷
Syn　(The Bulletin of Volunteer Studies)　Vol. 2　(2001)

〈論　文〉

研究・実践活動の概要と考察の糸口：2000年度

渥　美　公　秀

大阪大学大学院人間科学研究科
ボランティア人間科学講座

研究・実践活動の概要と考察の糸口：2000年度

渥　美　公　秀
（地域共生論）

要　約

2000年度に行った研究・実践活動の概要を紹介し、今後の研究・実践における考察の糸口を提示した。今年度指導した卒業論文の１つをもとに、ボランティアの動機と社会的機能に関して、災害救援を念頭に考察し、有用性を超えた活動としてのボランティア活動が防災に果たす役割を提示した。一方、今年度指導したミニ卒業論文をもとに、提供してほしいことと提供できることとのマッチングについて理論的な考察を行い、両者は、社会的に構成されることを示唆した。

キーワード：ボランティア、動機、社会的機能、マッチング、社会的構成

本稿では、本年度に行った研究・実践活動[1]を簡単に紹介した上で、卒業論文・ミニ卒業論文（の一部：「実験実習」の課題）に絡めて、自分なりの考察の糸口を記す。卒論やミニ卒を私の一方的な角度から採り上げるので、ここで提示される論点に対して、卒論・ミニ卒の著者に責任はない。また、あくまで考察の入り口として捉えているので、まだ議論は成熟していないし、これから思わぬ方向に考察が展開する可能性も十分ある。従って、“ちょっとした私的メモ“として読んでいただければ幸いである。

研究・実践活動の概要：2000年度

震災6年目となった2000年度も、刺激に満ちた一年だった。学術論文が複数掲載[2]されたし、分担執筆者に加えて頂いた本も出版された。また、初めての単著も出すことができた。当然のことながら、国内外の学会でも発表した。日本グループ・ダイナミックス学会では、発表はもとより、運営の中枢部に加わって活動の幅を広げつつある。日本心理学会では、Gergen夫妻とご一緒し、シンポジウムでも発表する機会を得た。

研究会活動も充実してきた。東北大学・京都大学の皆さんとのフィールドワークに関する研究会は、3回目を迎え、刺激に満ちた議論の場となった。京都大学防災研究所では、これまでの研究会に加えて、救援シミュレーションや、地域通貨に関する新しい研究プロジェクトも始まろうとしている。

実践的な活動としては、台湾大地震から1年を迎えた現地に赴き、被災者を個別に訪問して話を聞いた。また、特定非営利活動法人 日本災害救援ボランティアネットワーク（http://www.nvnad.or.jp）が事務局を務める全国災害救援ネットワーク（Jネット）もようやく初の全国大会を開催することができ、震災以来の企画が、皆さんのご協力でまた1つ実現した。アトランタで開催された全米災害救援ボランティア機構(http://www.nvoad.org)の年次大会には、今年度も出席したばかりでなく、事務局長を日本に招く機会にも恵まれた。さらに、大学の後輩を中心にecostyle.net(http://www.ecostyle.net)というNPOが始動し、環境問題にも本格的に目を向け始めた。

さらに、広く研究・実践活動を知って頂く機会にも恵まれた。一般的な書物や雑誌にもいくつかの文書を掲載して頂き、連載にも初めて取り組んだ。また、各地で講演する機会を与えて頂いているが、今年は恒例のテーマ（e.g., 災害ボランティア、まちづくり、動物介在療法など）に加えて、健康・教育・園芸とボランティアといった新しいテーマも生まれ、これまでの考えを整理するきっかけとなっている。これまでお世話になってきた方々との交流もあちらこちらで深まってきている。震災復興住宅でのまちづくり、地域通貨などのフィールドは、こうした方々のお世話によるものである。また、本を出版したときには、恩師や大学の同僚はもとより、お世話になっている神戸大学名誉教授や、現場で活動されている方々から、実にたくさんの励ましのコメントをいただいた。最後に、震災以降、被災地で一緒に研究・実践活動をしてきた大学院生の１人が、これまで学術雑誌に発表してきた論文を中心に博士論文を提出し、学位を得たことは、指導に関わった１人として大変喜ばしいことであった。

私的には、アメリカ留学から帰国して以来住んでいた兵庫県西宮市から、大阪府交野市に引っ越した。交野は、小学生の頃から留学するまでを過ごした街で、思い出深い。ちなみに、娘達が通う小学校は、私の祖母から数えると親子4代がお世話になっている。私にとっては古くて新しいこの街で、また新たな出会いが生まれてくることを期待しながら暮らしている。

卒論から

今年度は、２名の卒論生を指導した。そのうち１名（諏訪晃一）は、本学大学院に進学したので、その内容については、本人による学会や学術雑誌等での発表に委ねることとし、ここでは、星子ユリによる「現代社会におけるボランティアの動機－バタイユの＜消費＞概念からの考察－」に言及する。

この論文は、ボランティアの動機を、個人に内在する心理過程として捉えるのではなく、社会的に構成された言説として捉え、バタイユの著作「呪われた部分」(Battaille, 1949) に依拠しながら、現代社会におけるボランティアのあり方について理論的に考察した意欲的な論文である。ボランティアは、「現在という時を、その現在という時以外にはなにものも目ざすことなしに享受する状態」、すなわち、「至高性」に向かう活動の１つであるとの結論は、動機についての原理的な考察やバタイユの議論を援用した現代社会の考察を経ているので、説得力に満ちている。

現場で活動するボランティアから、「楽しくて続けています」「ただただ活動しています」といった声を聞いてきた私は、「社会の役に立ちたいからボランティア活動に参加する」とか、はたまた「社会に役立つためにボランティア活動への参加を促す」といった言説にいつも違和感を持っていた。そして、ボランティア活動において、行為者の動機と活動が社会に果たす機能を混同して考えることの危険性を感じてきた。ボランティアの「社会的機能には還元し尽くせない独自な＜意味＞」(中野, 1999) を、現代社会への鋭い洞察とともに、理論的に明らかにしようとしたこの論文を一緒に考えることは、これまでの自分の考えを整理し、今後の考察の糸口を探り当てる絶好の機会となった。

先日、京都大学防災研究所で研究発表を行う機会があった。星子論文を指導しながら考えてきたことを防災と絡めて発表した。配布資料「ボランティアの＜動機＞に関する一考察」(渥美, 2001) を加筆修正してここに紹介しておこう。

災害ボランティアの＜動機＞と社会的機能

平成12年度国民生活白書（経済企画庁, 2000）には、国民の4人に3人が「何か社会の役に立ちたい」と考え、国民の3人に1人が「何らかの形でボランティア活動に参加したい」と考えている姿が報告されている。確かに、「何か人の役に立ちたいから」「きれいな海を取り戻したいから」など、社会＝人や環境の役に立ちたいから活動に参加するボランティアは存在する。ここには、社会に役立つことが目的、ボランティアはその手段という構図が見える。

活動現場の言説

ところが、ボランティア活動の現場に参加していると、前節とは異なった言説を耳にする。

「ボランティア未来論」（中田, 2000）の著者、中田豊一氏は、長年、国際協力の分野でボランティア活動に参加してこられた（http://www.f3.dion.ne.jp/~ipdev/）。彼は、バングラデシュの農民から「なぜあなた達は、遠いところから来て、縁もゆかりもない私たちを助けてくれるのか。そんなことをして、あなたたちにどんな利益があるのか」と問われる。この根元的とも言える問いに対して中田氏が応えようとしたのは、次のことである。

「あなたも知っているように、私たちの間には、もともとなんの関係もありません。私があなたを援助する義務もありませんでしたし、援助するためのこれといった理由も思いつきません。私は、私の問題を解決するために努力する。あなたはあなたの問題を解決するために努力する。それだけのことです。その一方、私だけの問題は存在しないし、あなただけの問題も存在しないことも確かです。私は、自分だけで自分の問題に気づくことはできないし、あなたもそれは同じことです。私というものには、固定的な実体はなく、自己とは他者との関係においてのみ成立するものだからです。だから私は、この場この時を共有しているあなたと私との関係について、あなたと語り合ってみたいのです。あなたに本当に援助が必要なのか、私たちが真になすべきことは援助なのか、私たちの関係の奥に潜むそれぞれの問題は何なのかを、あなたといまここで共に問うてみたいのです。あなたは、どうですか（pp.203-204）。」ここには、ボランティアが、相手との関係の中で、自分の生き方を問う姿が現れている。

また、国連ボランティア名誉大使として活躍されている中田武仁氏は、私からの質問に「“Because I am here”としかいいようがない。私がこの世に生を受けている限り、ボランティア活動は私の生存意義そのものだとしか答えようがない」と応じて下さった。また、最近のボランティア活動には、「やりたい時にやりたい事をすればよい」という特徴が見られると指摘する社会学者（e.g., 三上, 1998）もいる。さらに、特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワークでの活動を通して、これまで、インドネシアイリアンジャヤ震災（1996年）、北関東・南東北水害（1998年）、台湾集集大地震（1999年）などで現地に足を運び、救援活動に関わるとともに、研究者の一人として、ボラン

ティア活動の現場を考えてきた自分自身を振り返ってみても、居ても立ってもいられず、“ただ傍にいる”ために活動に参加してきたとしかいいようのない気持ちが甦る。このような言説には、何かの役に立つということを超え、自分と相手という区別さえ解消され、もはや、「ただ活動している」としか言いようがない視点が見られるのである。もはや、ボランティアは、単に何かの役に立つ“手段”というわけではなさそうだ。

社会的に構成される＜動機＞

通常、動機 (motivation) は、個人の内部に措定された心の過程（の１つ）とされ、ボランティアの動機に関してもこの立場からの研究（e.g., Clary, et al., 1998）がある。しかし、動機は、社会的に構成される(Gergen, 1994)のであって、身体の内なる心に生じる現象ではない。これを＜動機＞と記す。＜動機＞は、特定の規範のもとで妥当とされるいわば「語り口」である。

一般に流布している＜動機＞は、目的を定めて達成することを妥当とした近代社会の規範のもとで構成された言説だと解釈できる。一方、前節で紹介した言説に見られる＜動機＞は、ボランティアが注目される現代社会の規範を照射している言説だと解釈できよう。ボランティア活動に参加する人々は、社会の役に立ちたいからといった何らかの有用性を備えた手段としてのボランティアではなく、むしろ、それ自体として生の充溢であり、歓喜であるような領野（Battaille, 1949；星子, 2001）を垣間見ている。

これまで日本社会は、何か大きな目標を定めて、その達成に向けて進んできた。目標に到達するために有用な事柄は評価され、目標達成に向けた効率が重んじられてきた。その結果、有用性を問わない分野というのは、限定され、その意義が隠蔽されがちであった。しかし、現在、国家、宗教、教育、経済といった様々な場面で綻びが見え始めている。そして、その反動として、旧来の規範への回帰が単純に、あるいは、巧妙に囁かれている。

ボランティアは、これまでの規範を暴力的にうち破ろうというのではない。ボランティアは、これまでの有用性一点張りの生き方から、近代社会の価値を超えたところへと、いわば、静かに逃走するような生き方の１つなのである。

ただ、社会の役に立とうとしないなら、そんな（ボランティア）活動にどんな意味があるのかという反論があろう。実は、ボランティア一人一人にとっては、有用性を超え、手段ではないボランティアが、「結果として」社会の役に立つのである。

「ただ活動する」ボランティアと防災

では、「ただ活動する」ボランティアは、防災にとってどのような機能を果たすのだろうか。われわれの日常生活は、「共同で無視された事柄」に囲われた領域を形成している。「何かの役に立ちたい」ボランティアは、この囲われた領域内に目標を設定し、その達成に向けて活動している。一方、有用性を超えて活動するボランティアは、日常生活という囲いから飛び出し、いわば次元の異なるところへ触手を伸ばしている。従っ

て、常識では考えられないようなことを思いついたりするが、日常生活の次元からはその全貌を見ることができない。彼らの活動を日常生活の囲いと同じ次元に投影すれば、日常生活の囲いの外側に像を結ぶ場合がでてくる。このとき、ボランティアは、日常生活で「当たり前」として無視してきた事柄を指し示す。ところで、当たり前として無視してきた事柄を顧みることは、防災の基本ではなかったか。

このように、一人一人のボランティアに焦点を当てれば、有用性を超えた活動が、「結果として」日常生活の再点検となり、より豊かで堅牢な社会へと導く可能性を秘めている。ここに災害ボランティアの＜動機＞と彼らが防災に果たす機能との接続を見ておきたい。

もちろん、「当たり前」としていることには、防災と関係ない事柄が多く含まれているだろうし、また、「当たり前」としている事柄を点検しても、結局、防災にはつながらない可能性は残る。しかも、「当たり前」としている事柄を点検したことによって、それまでスムーズに進んでいたことが妨げられることさえ考えられる。さらに、当然ながら、既存の“目的”を達成するための活動に価値がなくなるわけではない。しかし、有用性を超えたボランティアの活動が、われわれの日常生活に新たな選択肢をもたらす可能性、ここに意義を見いだしたいと思う。おそらく、今後は、有用性を超えた活動としてのボランティアを、いかにしてボランティア活動に参加していない人々に知らせていくかということが1つの課題となってくるものと思われる。

ミニ卒から

さて、ミニ卒では、「迷惑ボランティア」やNPOの運営といったことをテーマに採り上げた学生を担当した。共通して見えてきた事柄の1つに「提供して欲しいこと（ニーズ）と提供できること（シーズ）のマッチング」という問題がある。「迷惑ボランティア」とは、このマッチングを欠いた（と見られる）ボランティアのことを指しているようだし、NPOでは、マッチングを図ることがそのマネジメントにおいて重要だとされる。

当然ながら、マッチングを行うには、ニーズが何であり、シーズが何であるかを同定できなければならない。だから、ボランティア活動をするときに、相手に何をして欲しいかと尋ねることがあるし、ボランティア活動の参加者には、何ができるかと問う場合がある。

しかし、ニーズやシーズが明らかではない場面も多い。私が関わってきた災害救援のような場面では、生命の安全や水の確保といった基本的なニーズは理解できるし、そのニーズを満たすために活動する時期がある。ところが、緊急期の救急救命活動が一段落すると、被災者のニーズはたちまち捉えがたくなる。もちろん、遠慮してニーズを言わないとか、救援に向かうわれわれがシーズらしきものを何も持ち合わせていないといった笑えない事態も起こりうる。しかし、思わぬことがニーズであったり、何でもないことがシーズであったりすることが後でわかる時も多い。振り返ってみれば、自分が阪神淡路大震災で被災したときも、「ニーズは何か」などと問われれば、咄嗟には答えが出なかったように思う。また、ボランティアの受付にいて、駆けつけてくれたボランティアから「この団体では何ができますか」と問われても、次から次へとできることを列挙していって、必ず最

後には、「他に様々なことに対応できます」と言うしかない。

実は、ニーズとシーズが同定できて、それをマッチングするのだという発想を反省しなければならないのではなかろうか。そもそも、人は自分のニーズに自分自身で気づくことができるのだろうか。ボランティアは、シーズを自覚できるのだろうか。どうもそうではなさそうである。

ニーズやシーズが個人に内在しないことは、前章で引用した中田豊一さんの言葉にも示されているが、このような知見は隣接する学問分野にも見られる。例えば、作られた欲望なる着想は、消費社会論などでは、すでに常識の範疇のようである。臨床心理学でも、クライエントの内部に何か問題が内蔵され、それを暴き出す能力をもったカウンセラーが対応するというよりも、クライエントとカウンセラーが共同で物語を紡ぎ出すということに注目が集まっているとも聞く。ライフヒストリーを聞き取るフィールドワーカーも、決して対象者の言説を客観的なデータとして捉えるのではなく、その場に居合わせた語り手と研究者が共同で語りを編んでいると考えた方がわかりやすい。

となれば、ニーズとシーズは、(たとえ空間的に離れていても) その場に居合わせていると感じる複数の人々が、“その場”で、共同で構成していく事柄だと考えられる。いわば、ニーズもシーズもローカルに、社会的に構成されると捉えることができる。理論的には、社会的に構成されるニーズやシーズという考えを深める必要を感じる。実践的には、生命維持のような基本的なニーズは専門とする人々 (例えば、救急医療に携わる人など) に委ね、ボランティアは、被災者とともにニーズやシーズを共同で構成していくことに力を傾けられるように活動することなどが課題となる。そもそも、ボランティアやNPO・NGOの側が、相手のニーズや自らのシーズを独立に“確定”することに問題があることは自明だろう。まだマネジメント理論を皮相的に理解したに留まるし、「迷惑ボランティア」なるものの明確な定義も欠いたままの議論であるのだが、ニーズとシーズのマッチングの程度をもってNPOを評価するといった動きには、少し反省を加えて対処して行くことができるような気がしている。

講座紀要では毎年書くことになろうが、卒業・修了していく皆さん一人一人に対し、充実した時間をともに過ごすことができたことを感謝し、「常識に縛られず、柔軟な思考をもって、活き活きとした時間を過ごしてください」という言葉を贈りたいと思う。

参考文献

Battaille, G. 1949 *La part maudite*. Paris: Les Editions de Minuit. 生田耕作 訳 呪われた部分 二見書房 1973.

Clary, E. G., Ridge, R. D., Stukas, A. A., Snyder, M., Copeland, J., Haugen, J.,& Miene, P. 1998 Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. *Journal of Personality and Social Psychology,* **74**, 6, 1516-1530

Gergen, K.J. 1994 *Toward transformation in social knowledge 2nd ed.* London: Sage. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀 監訳 もう一つの社会心理学 ナカニシヤ出版 1998.

星子ユリ 2001 現代社会におけるボランティアの動機－バタイユの＜消費＞概念からの考察－ 大阪大学人間科学部卒業論文

経済企画庁 2000 平成 12 年度国民生活白書 －ボランティアが深める好縁 大蔵省印刷局

McNamee, S. & Gergen, K.J. 1992 *Therapy as social construction.* New York: Sage. 野口裕一・野村直樹 訳 ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践 金剛出版 1997.

三上剛史 1998. 新たな公共空間 社会学評論, **48**, 453-473.

中野敏夫 1999 ボランティア動員型市民社会論の陥穽 現代思想, **27** (5) 72-93

中田武仁・内海成治・渥美公秀・早瀬昇・大熊由紀子 1998 国際協力とボランティア 大阪大学人間科学部紀要創立 25 周年記念別冊, 83-106.

中田豊一 2000 ボランティア未来論 コモンズ

2000 年度論文・学会発表一覧

学術論文

渥美公秀 2000 ボランティア研究の射程 *ボランティア学研究*, **1**, 57-71

渥美公秀 2000 災害ボランティア組織の変容過程－日本災害救援ボランティアネットワークの事例 *京都大学防災研究所年報*, **43**,

渡邊としえ・渥美公秀 2000 阪神大震災の被災地における「まちづくり」に関するフィールドワーク－西宮市安井地域の事例－ *実験社会心理学研究*, **40**, 50-62.

書 籍

渥美公秀 2000 ボランティア活動 久世敏雄・斉藤耕二監修 *青年心理学事典* 福村出版

渥美公秀 2001 *ボランティアの知－実践としてのボランティア研究* 大阪大学出版会

渥美公秀 2001 イギリス：学生ボランティアの支援体制 財団法人内外学生センター 大学とボランティアースタッフのためのガイドブック 財団法人内外学生センター

渥美公秀・渡邊としえ 2000 日本災害救援ボランティアネットワークの経緯と理論的整理 杉万俊夫 編著 *よみがえるコミュニティ* ミネルヴァ出版

学会発表

渥美公秀 2000 ボランティア社会に向けて (3):事例 被災地での 5 年にわたる協働的実践 *日本グループ・ダイナミックス学会第 48 回大会* 東洋大学

渥美公秀 2000 災害ボランティアとの協働的実践 *日本心理学会第 64 回大会* 京都大学

Atsumi, T. 2000 Nothing is More Practical than a Good Research Framework: A Longitudinal Study of Disaster Volunteers. *XXVII International Congress of Psychology*, Stockholm, Sweden

渥美公秀 2001 ボランティアの＜動機＞に関する一考察 防災研究所研究発表講演会 京都大学

加藤謙介・渥美公秀 2000 老人保健施設Cにおけるドッグ・セラピー －ケアにおけるホスピタリティー *日本グループ・ダイナミックス学会第 48 回大会* 東洋大学

加藤謙介・渥美公秀 2000 「人と動物の共生」に関する予備的考察 (1) －イギリスにおけるチャリティ団体の活動事例－ *第 2 回国際ボランティア学会大会* 姫路工業大学

鈴木勇・渥美公秀 2000 災害救援と地域コミュニティ －災害ボランティアネットワークの事例研究

日本グループ・ダイナミックス学会第48回大会発表論文集, 東洋大学

Suzuki, I. & Atsumi, T. 2000 A case study of voluntary organizations active in disaster. *XXVII International Congress of Psychology*, Stockholm, Sweden

渡邊としえ・渥美公秀　2000コミュニティ変容に関する研究－災害復興公営住宅の事例－　*日本グループ・ダイナミックス学会*　東洋大学

Watanabe, T. & Atsumi, T. 2000 Processes of arrangement, extension, and innovation of the words; collaboration and community power . *XXVII International Congress of Psychology*, Stockholm, Sweden

一般論文

Atsumi, T. 2000 The Role of Volunteers: Their potential demonstrated by the earthquake. *Pacific Friend,* **27,12,**26-27.

渥美公秀　2000　NPOの条件整備のために　*TOMORROW*, **14**, 4, 42-50

渥美公秀　2000　雑感：研究者としてフィールドに臨む時　$\Sigma \Upsilon N$, **1**, 31-40

渥美公秀　2000　学生ボランティアの支援体制－ヨーロッパの事例 *大学と学生*, **429**, 6-21

渥美公秀　2001　一歩外へ－ボランティアの意義と魅力　ユースネットワーク

渥美公秀　2001　ボランティアに新しい生き方を垣間見る－現代日本のボランティア－*読売ADリポートOjO*, **3**, 12, 21-23.

他、報告書やインタビュー記事など

注

i もとより、研究・実践活動は、大学院生と一緒に行ってきたものが多い。表記の煩雑さを避けるというだけの意味だが、本稿では個々に名前を挙げることはしなかった。

ii この節の書誌情報は、文末に一括して掲げる。

Looking back upon the Academic Year 2000 : Some Clues to Future Research

Tomohide ATSUMI

Abstract

The present paper summarizes my research activities and practices during the academic year 2000, and identifies some issues for future investigation. One of the graduation theses I supervised led me to consider the motivation and social functions of volunteers in the context of disaster relief. I discovered that volunteers without particular, pre-identified goals could play an essential role in disaster mitigation. A couple of pre-graduation theses led me to examine the match between needs and resources. It was suggested that each need as well as resource was socially constructed.

Key words : volunteer, motivation, social function, social construction